特集　診断士よ，勝負脳を鍛えろ！

# 第１章　〈総論〉「勝負脳」とは何か

黒川　如
東京支部中央支会

## １．はじめに

独立を考えたとき，ふと思った。「プロのコンサルタントとは何だろう。プロと呼ばれる人たちは何が違うんだろう」と。

「プロフェッショナル」については，毎年のようにどこかで誰かが論じている。それほど奥が深くて皆の心を惹きつけてやまない，永久不変的なこのテーマについてあらためて考えてみたいと思っていたとき，「勝負脳」という言葉を知った。

みなさんは「勝負脳」という言葉をご存じだろうか。去年の北京オリンピック以降，注目を浴びているこの言葉。大舞台で結果を出す勝負強さ。それを支えたのが「勝負脳」だという。

いろいろ調べていくうちに「勝負脳」はスポーツ選手だけでなく，誰でも鍛えることができ，仕事や日常のなかでも「負けられない」場面に遭遇したとき，うまく活用すれば最高の結果を得られる，ということがわかった。

今回はこの「勝負脳」を通じて「プロフェッショナル」へアプローチし，中小企業診断士としてどのように活用できるかを考えてみたい。

## ２．「勝負脳」とは何か

### ⑴　「勝負脳」は造語である

「勝負脳」という言葉は，日本大学大学院教授，林成之氏の造語である。林教授の著書，『「勝負脳」の鍛え方／講談社現代新書』によれば，「勝負脳」とは言語を話す知能，数を計算する知能，空間を認識する知能などとともに，人間の脳に本来備わっている知能の１つだという。

「勝負脳」は，特別な人だけが持っているものではなく，人間，誰もが持っている，ということだ。いいかえると，この「勝負脳」を鍛えれば誰もが「勝負強さ」を発揮できる，ということになる。

> 「勝負脳」は特別な人だけの知能ではない。
> 誰にでも備わっている。

具体的には勝負脳は「勝負に勝つための戦略を練る知能」と表記されている。その「勝負」はプロスポーツ選手だけでなく，我々の日常のなかにも多々潜んでいる，という。

たとえば，子どもの頃の運動会でのかけっこも「勝負」だった。友達とテレビやトランプでゲームをしても「勝負」であるし，傍から見ればくだらない兄弟げんかも本人たちは真剣に「勝負」をしている。我々，診断士も試験という「勝負」を乗り越えて，ここまで来た。少し考えてみても「勝負」は我々の身近にあり，大なり小なり「勝負」を日々繰り返しながら生きていることになる。

その「勝負」に勝つためにいろいろと策を練り，あの手この手を考えるのが「勝負脳」だという。

### ⑵　「勝負脳」と「心」の関係

ここで，林教授はおもしろいことを書いている。

人間の「意識」と「心」と「記憶」は海馬回でつながっている，というのだ。「記憶」は脳に蓄えられるものであり，「心」や「意識」とは別のものである。しかし，それらは海馬回でつながっており，さらにこのことが「勝負脳」を考えるにあたっての大前提となるらしいのだが，ここでその理由と仕組みについて論じられるほど，著者は医学に詳しくはないので割愛させていただく。

詳しくは，以下の書籍を参考にしてもらうとし

て，林教授の結論だけ拝借して話を進めたい。

| |
|---|
| 〈勝負脳〉の鍛え方／林成之著<br>（講談社現代新書） |

**①「脳」と「心」はつながっている**

この例を，林教授は以下のように挙げている。

| |
|---|
| **心と脳の働きは連動していて，性格のいい人は脳の働きがよく，頭もいい。**<br>**ほんとうに頭のいい人はすぐれた心の持ち主である。**<br>「望みをかなえる脳」／林成之著（サンマーク出版）より引用 |

これについて，筆者は深く納得した。周囲から認められている人，活躍している人は，人格的にも魅力的で「こんな風になりたい」と思わせてくれる人が多い。仕事ができる，ということだけでなく，話し方や言葉遣い，周囲への気配り，気遣いが素晴らしく，謙虚なのだ。自身の経験としては，恥ずかしながら，先輩診断士と打ち合わせの後に礼をして別れるとき，診断士になりたての自分のほうが高いことに気づいてあわてて頭を下げ直すことがあった。そのたびに，「自分はまだまだだな」と思い知らされる。

**②　竜王戦にみる「勝負脳」と「心」**

今回，この特集を企画しようと思っていたとき，ちょうど将棋の第21回竜王戦が行われていた。渡辺竜王に羽生名人が挑戦する形で，どちらが勝っても初代永世竜王の資格を得る，という歴史的な戦いだった。結果としては，渡辺竜王が連続５期目の防衛をして初代永世竜王の資格を獲得したのだが，今回は第７局までもつれ込み，渡辺竜王が３連敗の後４連勝という将棋界初めての大逆転で幕を閉じた。

このことは，新聞や雑誌にも取り上げられ，この先長く将棋ファンの間で語り継がれることになると思うが，３連敗を喫した後の第４局に臨む渡辺竜王の心境を彼のブログその他で知ることができた。

特筆すべき点は多々あり，紹介したいことは山ほどあるが，ここでは興味深い言葉を１つだけ取り上げたい。

それは「あきらめない」ことである。

心を強く持ち，最後まであきらめずに将棋と向きあう。それが，各世代を代表する天才棋士同士の激闘を制し，劇的な勝利を呼び込んだとすると，「脳」と「心」はやはりつながっており，「勝負脳」の発揮には重要なポイントであることが垣間見える興味深い事例である。

| |
|---|
| 棋士・渡辺明ブログ<br>http://blog.goo.ne.jp/kishi–akira |

この他にも「プロ」の世界にはおもしろいエピソードがたくさんあり，「勝負脳」と結びつけて考えるとまた違った感動が蘇ってくるだろう。

それらについては，第２章の「事例から勝負脳を考える」で楽しんでほしい。

### ⑶ 「勝負脳」を支える「心・技・体」

**①「心・技・体」は密接に関連している**

林教授は，著書のなかで「心技体」の重要性を説いている。

それに関してこんな興味深い記述を見つけた。

| |
|---|
| **頭をよくしたかったら，恋をしなさい。**<br>「望みをかなえる脳」／林成之著（サンマーク出版）より引用 |

一見，何のつながりもないように感じるが，よくよく考えると，合点がいく。

恋をすると，心が前向きになる。毎日が楽しく，意欲的になる。すべてに積極的になり，自分磨きや自己研鑽，新しい知識の吸収にも力が入る。そういう前向きな姿勢で取り組む仕事は，上司からの指示による「やらされ仕事」とは異なり，自ら率先して取り組むことができる。心身が充実した状態で精一杯やるので，よい結果もついてくる。それは，順調な恋であればあるほど顕著になる。

また逆に恋に悩むと，仕事に失敗することが多い。思い悩むあまり，夜も眠れず睡眠不足から注意力が散漫になり，挙げ句の果てに体調まで崩してしまう。「心」が沈むと「技」も発揮できなくなり，最終的に「体」にも異変が起こる，という身近な例ではないだろうか。

**②「心・技・体」の持つ力**

「心技体」をそれぞれ鍛えることは大切である。しかし，それだけではいけない。うまくシンクロさせて，互いに最高の状態で勝負に挑まなければ，「勝負脳」を自分のものにしてもその力を最大限に発揮できないのだ。

その例として，最近，若者の間で流行っているダーツで，筆者が経験した「心技体」のシンクロについて伝えてみたい。




１から20までの数字とそれぞれの×２，×３，さらに真ん中の赤い丸と黒い丸で点数が決まるこの競技。

基本的にダーツ（ハード）では，真ん中の赤と黒の円の中を狙う。赤は25点で黒は50点になる。

たいてい，少し下に落ちて３点とか，大きく斜め上に外れて18点とか，悲しいくらい自信喪失に陥ることが多いが，ごく稀に，ダーツボードの前に立ち，構えて，投げる瞬間に「入った！」と思うことがある。あの感覚。

そういうときはたいてい，黒のど真ん中にきれいに矢が刺さっている。

数少ないそのときのことを思い返すと，以下のことが挙げられる。

- **心**は非常に穏やか
- **体**はどこも力まず，腕はまっすぐ素直に振り降ろされ，ちょうどいいポイントで手からダーツの矢が離れる
- そのときのフォーム（**技**）は素晴らしく美しい

これら三拍子揃って初めて，あの感覚が得られるが，逆にいえば矢があっちこっち飛ぶのはこれらのうちどれか１つ以上が欠けている状態だといえる。

みなさんも他のスポーツでこういうご経験はないだろうか。

ゴルフでも当たった瞬間「行った！」と感じたり，水泳などで泳ぐ前から「自己ベスト記録が出る気がする」など，「心技体」がいい具合にシンクロしているときというのは，「勝負脳」を発揮しやすい状況で，これらのご経験が思い当たる方はすでに「勝負脳」と「心技体」をうまく活用できているといえる。

そうはいってもやはり，「心技体」をシンクロさせて高いレベルで結果を出すには，「心技体」それぞれ日々の鍛錬が必要である。

中小企業診断士として，それ以前にビジネスマンとしての「心技体」の具体的な鍛え方，考え方は，第３章の「勝負脳の心・技・体」を参考にしてほしい。

### ⑷　「勝負脳」の発揮どころ

「勝負脳」と「心技体」のシンクロだけではまだ足りない。

それらをどこで発揮するかがその成功を大きく左右する。

たとえば，診断士試験は60%の得点で合格できる。そこで100点を目指すとなかなか合格にたどりつかない。いわゆる「勝負どころ」を間違っているのだ。それに気づかないとなかなか合格に達しないのが，診断士試験の罠なのだと思う。

いつも「勝負脳」を発揮していると疲れる。また，そんなに頻繁に発揮できるものでもない。勝負の流れを読み，どこが一番の勝負どころなのかを見極め，もっとも適切なところで「心技体」のシンクロを発揮するセンスも「勝負脳」には大切である。

一番簡単な例は，先ほどのダーツであろう。

あの，投げた瞬間に「入った！」という感覚はカラ投げ（練習）のときでは困るのだ。いいかえれば，ゴルフの打ちっぱなしでビュンビュン飛ばしていても，実際にコースに出るとてんで飛ばないのでは困るのだ。

でも残念ながら凡人の筆者は，練習のときにしかあの感覚を得られない。これを自分が「ここぞ」というとき，たとえばこの最後の一矢で勝負が決まる，というときに「心技体」をシンクロさせ，意図的に「勝負脳」を発揮してこそ意味がある。本当の「プロフェッショナル」は，ここ一番の大勝負のときに，「勝負脳」を発揮して結果を出すことが必要である。そうなるように「勝負脳を鍛える」ことこそが「プロフェッショナル」への道であると思う。

勝負脳の発揮どころについては，２人の中小企業診断士を例に，物語にしてみた。

第４章，第５章の「勝負脳」取扱説明書①，②を参考にしてほしい。

**黒川　如**
（くろかわ　ゆき）
**1978年生まれ。2007年，中小企業診断士登録。現在，中小企業基盤整備機構関東支部「新連携事業」のアシスタントマネジャーとして中小企業のジャパニーズドリーム実現を支援中。**

